

眼の陶冶と帝國主義（四）

——大正期文芸教育論と生命主義芸術教育論——

有 田 和 臣

一 芸術教育論と片上伸『文芸教育論』

一・一 國民國家形成と芸術教育論の「進化」

一・二 『文芸教育論』までの片上伸

一・三 「自律」尊重の真意

二 大正生命主義と生命主義教育論

二・一 生命主義芸術教育論の勢力圏

二・二 生命主義教育論と人格教育

二・三 「人格生命」と「國家社會」への視線

三 「眼の陶冶」対「文芸主義」

三・一 片上伸の修身教育論と女子教育論

三・二 文芸主義と「見る」から「読む」への変換

三・三 文芸教育論批判の諸相

三・四 「眞の享樂」への視線

結

片上伸を中心論客とする大正期文芸教育論と、明治初期より連綿と存続してきた芸術教育論思潮との距離を検討する。芸術教育論全盛の中にあつて「文芸主義」を標榜した文芸教育論の特質は、芸術教育論の用語、論点を踏襲している点、中心的題材を絵画ではなく近代文学に求めている点、しかも文芸教科をすべての教育教科の中心に位置づけようと企図した点などにある。また片上の生命主義文芸批評と生命主義傾向を示す芸術教育論との間の同調と齟齬にも言及する。

一、芸術教育論と片上伸『文芸教育論』

一・一 国民国家形成と芸術教育論の「進化」

明治初期の芸術教育論においては、前々々稿^①に示した大井憲太郎、中村正直らの論に代表される如く、明らかな功利性が支配していた。明治十年代以降、反功利の側に立つと見られるフェノロサ、巖本善治らの勢力を生み、その方向が大正期・昭和初期にかけての芸術教育論の主流となっていく。この動きと歩調を合わせるかのように、「芸術」の語義範囲は明治十年代から明治三〇年代末にかけて、「文武百工」から「美術」とりわけ「絵画」に収斂していったのだった。しかし、芸術を修身教育と結びつけ、品性・人格の陶冶を提唱する点、「女子」に芸術教育をほどこすことの必要性を強調する点で、功利・反功利の立場の相違にかかわらず、同じ主張のパターンが継承されていくという現象が見られた。

反功利的立場に立つ芸術教育論の主張するところが、結果として特に明治初期の功利的立場からの芸術教育論とほとんど同一であるのが、一見奇異な現象であったわけだが、反功利の芸術教育論の背後に、国民をその内面から国家経済への寄与と「愛国の気風」に向かわせる意図が、必ずし

もそれに意識的である場合とばかりは限らないが、ひそんでいるありさまを、前稿^②までに確認してきた。

明治期から大正期にかけての芸術教育論、および大正期文芸教育論は、こうした同一パターンの反復・変奏による再生産という大きな流れを形成しており、この潮流独特の用語群が、各変奏がその源泉を同じくする事実を示してくれる。いわゆる国家主義を、さして意識しているとは思われない文学者が説く教育論にあつても、こうした用語の使用、あるいは「同一パターン」の反復・再生産が見られ、この潮流の影響力がうかがわれる。

当然ながら、反功利的芸術教育論の流れ、とりわけ明治末以降のそれ（いわゆる児童中心の教育論）の中には、初期の功利的芸術教育論には見られない用語、論点が見られるわけで、そうしたいわば新世代の芸術教育用語・論点、例えば「好事家主義」「芸術享楽主義」「芸術愛好^{ディレクショナルイズム}」「感覺教育主義」「趣味（教育）」といった用語、およびこれらにより「国民」の人格を陶冶し「各個人に幸福の源泉を供する^③」といった論点がこぞって指向するのは、被教育者の「自律」尊重である。被教育者の自律性を尊重しながら、精神人格を陶冶した国民がごく自然に「自ら進んで道徳に従ひ国家社会の為に働くにしても自ら好んで働く」ように、「所謂他律的でなく自律的に道徳に進んで行く^④」ようにし

むけるという意図が、暗然とその背後にあったわけである。

このように、反功利的芸術教育論における「自律」尊重の戦略には、国民をして自発的に優良な「国民」とならしめること、いわば国民に国家主義を内面化させる意図が認められることを前稿で示した。国民国家形成と歩調をそろえて、芸術教育論が「進化」をとげたのだと言える。こうした特徴をそなえた芸術教育論を、特に「大正期芸術教育論」と呼んでおく。

一・二 「文芸教育論」までの片上伸

芸術教育論の主要な素材となった「絵画」を「文芸」にずらし、芸術教育論の基本的な枠組みを継承したのが、片上伸を中心の論客として大正末に最盛期を迎えた「文芸教育論」である（「芸術教育論」も平行して存続する）。結論を先取りして言えば、片上の論は、明治以来の芸術教育論の思潮の流れの中に置いてみれば、その大枠はさしてオリジナルなものとは言えない。

片上の主張中の、それまでと異なる枠組みが、主として「美術（絵画）」に絞り込まれていた芸術教育論の対象を、「文芸」に向けようとした点であった。片上は「世間では、文芸の力によつて、学校に於ける修身教育の効果が妨げられ、薄められてゐるといふやうなことをいふ」などとして、

しきりに文芸の低位置を憂い、教育における地位獲得に努める。^⑥片上の成功の一要因はこのようにして、教育論思潮の中に絵画が獲得した高位置を、「文芸」に取り込もうとしたところにあると言える。すなわち片上の論の目新しさは文芸とりわけ「近代文学」を教育の中心に位置せしめようとした点にあるのであり、結果として、文芸による児童の自由で創造的な「生活力」伸長を訴えた片上の文芸教育論は「八大教育主張」のひとつに教えられ、教育界に相当の地位を占めるに至った。

片上が教育に興味をもつようになったのは、ロシア滞在中の大正五年春、山本鼎とともに子供の絵の展覧会と農民美術の展覧会に接してからであるという。帰国後、山本が自由画教育と農民美術の運動を興すと積極的にそれを支援し、大正八年四月に長野県神川小学校で開かれた第一回児童自由画展覧会では「感情教育の現実及理想」という題で講演し、教育論をも発表するようになった。

大正十年一月、片上は山本鼎、北原白秋らとともに教育雑誌『芸術自由教育』を創刊する。この教育誌自体は十号で廃刊となったが、上野浩道『芸術教育の研究』によれば、教育界で「赤い鳥」に比肩し得るほどの影響力をもったという。ここを拠点に片上はみずからの「文芸教育論」を実践にうつすべく精力的に活動した。^⑦

以下、明治期より連綿と続く芸術教育論思潮の流れの中に、片上の文芸教育論がどのように位置づけられ、存在意義をもったかを検討していく。大正九年、片上は次のように、教育界の「現状」を批判する。

今日の教育は、小学校から大学に至るまで、専ら実用的、しかも卑近の意味に於いての実用的効果を第一の目的としてゐる傾きがあつて、小中学校に於ける文芸的の教化目は、極めて軽い従属的のものと見られてゐます。

「實用」対「文芸」の図式をもつて文芸の地位を擁護する趣旨だが、こうした反實用、反功利の姿勢は、すでに明治十年代より、芸術教育論の中でくりかえし、そして継続的に提出されてきたものであつた。なにも「今日の教育」に固有の問題ではない。しかしこうした反功利的姿勢への要求は、明治から大正に至る芸術教育論思潮の流れの中で、まるでそれが新しい問題であるかのように叫ばれ続ける。例えば教育者小林左源治も片上とほぼ同時期、帝国教育会編『芸術教育の最新研究』に寄せた論で「何といつても今の教育の弊をいつたら功利主義だといつてよからう」とする。

それでいながらこの左源治ら教育プロパーの論者たちと片上の立脚するところは同じではなく、むしろ対立するものですらある。後述するが、両者の「芸術」に対する姿勢にはその根本において相違があり、また左源治ら教育プロパーの論者たちの言う、美術をはじめとする「芸術」と、片上の言う、「近代文学」をはじめとする「文芸」とではこれらに対する教育界での認識が大きく違つていた。結局のところ片上は教育者ではなく、あくまで文学者であつたという一点に、両者の差異は由来するものであらう。

一・三 「自律」尊重の真意

「教育は一種の芸術」¹⁾だとする教育者中島半次郎は、大正三年、「人格的教育学」²⁾を説きつつ次のように言う。

軍隊に於ける威圧訓練に依つて外部の服従や秩序を保つ代りに、人間の独立と自由と其品位とを認め内部より服従せしむることは眞の軍隊の訓練であらねばならぬ。それには如何にしても個人の価値を尊重する所の民主的共同的教化の発達に向かつて来なければならぬ。……管理と自由訓練と人の品性とが相一致せざる時には恐るべき危機が来る。

「軍隊の訓練」を引き合いに出しながら中島は「人間の独立と自由と其品位」を語る。それも、これらを認めることによって国民を「内部より服従せしむる」ためだ。そのために「舊教育では児童の意志を破り絶対に外部の教権に服従せしめんと努めた」ことの弊害があり、「此古き訓練に對して新しき自由を主張する教育学は個人の教化を高調し」過ぎて弊害を生んでゐるから、「管理と自由訓練と」のバランスをとれ、という説である。

「自由」を尊重する中島は、別の著書では「自ら進んで道徳に従ひ国家社会の為に働くにしても自ら好んで働く」ような、その意味で「所謂他律的でなく自律的に道徳に進んで行く」ような「所謂自由の服従」にしむけることを教育の目標としていた。やはりキー・ワードは「自律」であり、それが最終的に目指すのは国民の自発的な「服従」である。

さらに時代を遡って、明治期の芸術教育論を見る。明治三四年、「美術は国民生活の花にして、其の生活の根本は經驗を健全ならしめ、実学を奨励し堅実鞏固なる品性を陶冶するに在り。苟くも其の根本を健全に培養する時は花は自然に開く可し。須らく帝国主義の教育は、人格の上に最も重きを置かざる可からず」というように、「美術」と「人格」の相関性を主張した浮田和民は、明治四二年刊の

著書『倫理的帝國主義』において「美的教育」を次のように説く。

国民として美を愛すると云ふ心が無いと実利主義の一方に偏して忠君愛国と云つても実益のみに趨る傾向がある。……健全なる美的教育と云ふことは、実業教育又は国民教育の一要素として、發展せしむる必要がある。それが無くなつて來るときには殆ど国民として唯物質的利益あるを知ることになる。忠君愛国も唯物質的利益の爲にするやうなことになる。それで今後国家として大に美術を保護する方針を取り、又社会が美術を奨励する輿論を作るやうにならなければいかぬ。

「国家として大に美術を保護」したり「社会が美術を奨励する輿論を作るやうに」したりする必要があるのは、「実業教育又は国民教育の一要素として」であり、「忠君愛国も唯物質的利益の爲にするやうなことになる」のを防ぐため、つまり打算を超えた「忠君愛国」を育てるためである。「実業教育」と「国民教育」が並列されている点にも注目したい。

先の中島が「生産的國民の養成」と題して「精神的生活と結ばらざる生産力は外部的機械的のものとなつて根底あ

る開化に貢献することが出来ない⁽¹⁶⁾とし、人格教育の必然性を説く際の論法と、きわめて似通っているのがわかる。「功利」を実現するための、一見功利とは対立する美的教育であり、人格教育なのである。「美的教育」すなわち「芸術教育」が「人格教育」、修身教育を常に錦の御旗にしてきたのは、前稿までに見てきたとおりである。そして片上の論もまた、少なくとも外形は同じパターンの中にある。

二 大正生命主義と生命主義教育論

二・一 生命主義芸術教育論の勢力圏

自然主義擁護の立場から本格的な文筆活動を開始した片上伸だったが、明治末から大正初年にかけて「彼自身の、自然主義論における浪漫的、主観的、理想的色彩が顕著となり、ついに自然主義それ自体にあきたらなくなっていくて、生命論的、芸術至上主義の時代といわれる第二期に入った⁽¹⁷⁾」。やがてその「浪漫主義の指向が現実およびロシア文学へと向かつて」、大正三、四年頃からは「いわゆる人道主義的な時代といわれる第三期に入った」とされるが、片上の生命主義への傾倒は大正九年以降の文芸教育論時代にも継続して見られる。

明治末から大正期にかけて流行した生命主義、神秘主義の傾向をもつ思潮は鈴木貞美氏らによって発掘研究され、「大正生命主義」と名づけられている（「大正神秘主義」とも称される）。人間の内奥に潜在する人知を超えた生命力を標榜するもので、当時広範な影響力をもった思潮と考えられるが、その研究は緒についたばかりで、未だ広く認知されるには至っていない。

「生命主義」という大きくくりで言えば、すでに明治二十年代、エマーソンの啓示を受けた北村透谷「内部生命論」（明治二六年）、上田敏によるメーテルリンクの思想紹介・解説等々の存在があり、そうした「前夜」とも言える時期を経て開花したのが鈴木氏らの言う「大正生命主義」である。片上伸の「生命論的、芸術至上主義の時代」には、彼がこの思潮の影響下にあったと認め得る、明らかな傾向が見られる。

さらには片上の文芸教育論を含む大正期芸術教育論緒論にもまた「大正生命主義」の特徴を示すものが数多く見られ、これらが和辻哲郎『ニイチエ研究⁽¹⁸⁾』によるニイチエ思想解説文、および小林秀雄の初期批評と、多くの用語、論点を共有している事実が認められたのだった。ここには、大きくくりで言う「生命主義」、そして広い意味での「大正生命主義」には見られない共通の用語群が認められ

るのであり、「大正生命主義」の部分集合として、「生命主義芸術教育論の勢力圏」が存在したと見ることができ。これらについては、以前に拙稿で述べたので参照されたい。かいつまんで実例をあげれば、「生命根本の動力」「根本生命」を重んずる点で教育論と『ニイチエ研究』は共通性を持ち、「その人の全存在」「人間の全的活動」を重んずる点で『ニイチエ研究』と小林秀雄は共通性をもつ。そして三者すべてが「生命」という用語と等置される「生活の意力」「生活の力」「人間生活の意欲」を重んじ、意識をこえた潜在的原動力が人間生活の根本にあるという考え方を示している。

次の文章は、大正二年、「生命論的、芸術至上主義の時代」の片上のものである。

吾々は自分自らの力によつて、自分自らの力を増大することによつて、更に新しき創造を営まなければならない。自分の生活力の併発によつて、自分の生命の湧出によつて、自らの生活を作つて行かなければならない。自分の生命の燈し火を燃やし盡して、同時に新しく強き光を作りつゝ進まねばならない。⁽²²⁾

「生活力」、それと等置される「生命」といった用語を

核にして「自分自らの力を増大する」ような「創造」が語られている。これらの用語が偶然使われたわけではないことは、こうした用語や論点が片上の文章に一貫して使われ続けているのを見ることによつて確認できる。

次の文は、大正十年、文芸教育論時代の片上の論の一節である。

文芸は、……一切の人間生活の意欲を抑殺せずして、総てを十分に生かすことによつて根本の生活を強く遅しくして行かうとするのである。⁽²³⁾

「人間生活の意欲」という用語、「根本の生活を強く遅しくして行」くというフレーズが、片上の論が大正生命主義、狭くは生命主義芸術教育論思潮の勢力圏内にある事実を示してくれる。同時期に片上は、「これから伸びてゆく」とする年少子弟の生命に、本来備わつてゐるところの、自ら培ひ自ら癒す力の、「一種神秘的のはたらき」⁽²⁴⁾を信ぜよ、という言い方もしており、「大正神秘主義」とも別称される大正生命主義的傾向を如実にあらわしているのである。

「年少子弟の生命」の力を標榜する片上の教育論は、斬新で目新しいものとして教育界に受け入れられた。しかし次節に示すように、実は平行して同時期に、片上の論と用

語、論点において共通性をもつ生命主義的教育論の存在があった。年代的に言えば、小林の初期批評、一大ロングセラールとなった和辻哲郎『ニイチエ研究』には、片上の生命主義的な文芸論は幾分先行するわけだが、片上が文芸教育論に手を染めるのは『ニイチエ研究』以後であり、また片上の文芸教育論と生命主義芸術教育論出現の時期は近接しており、今それらの間の相互影響について前後関係を一概に特定することはできない。生命主義芸術教育論勢力圈内における影響の前後関係については今後の調査に期すとして、ひとまず本稿では芸術教育論思潮と片上との距離の検討に焦点を定めることとする。

二・二 生命主義教育論と人格教育

生命主義の傾向をもつ教育論は、主として芸術教育論に集中して見られる。加えて、これと近い位置にあった人格教育論の一部にも見られるものである。そこでこれらを総称して、「生命主義教育論」（芸術教育論思潮の中で生命主義的色合いをもつ生命主義芸術教育論の一群、およびその周辺に衛星的に位置する人格教育論、修身教育論、女子教育論等）と呼ぶことにする。

生命主義芸術教育論から実例をあげる。帝国教育会編『芸術教育の最新研究』に寄せた「鑑賞批評の態度」で水

鳥川安爾は「美の価値創造を主目的とする芸術教科の本領は生命の深化魂の啓培に在る」としつつ言う。

凡そ、芸術は生命の表現である。作家の個性人格の表現であり、理念の表出である。したがって芸術作品は、作家の個性、作家の人格、作家の理念、すなはち作家の生命に満ちたものである。²³

「生命」というキーワードが見られる他、これが「作家の個性、作家の人格、作家の理念」とイコールで結ばれている点に注目したい。大正生命主義の開花期から流行期にかけての時期に芸術教育論と生命主義が合流する必然性を問うていくと、前稿で示した、芸術教育論における「趣味」重視流行の場合と同様、国民をして自発的に国家経済振興および愛国の気風に向かわせるための戦略が見えかくれするからだ。この戦略は、あるときには「精神」「人格」を重視する教育姿勢の形をとり、またあるときには「感情」「気分」を重視する形をとり、別のあるときには「趣味」向上「芸術愛好」増進の形をとり、そのかくれた意図を実現しようとするものだった。

「所謂自由の服従」をすすめた中島半次郎は著書『人格的教育と我国の教育』第五章第二十四節「人格教育と国

民教育の一致」で、「人格といふのは其国民としての活動を外にしては存せぬ者と解せねばならぬ」としていた。教育論に掲げられた「人格」陶冶の旗印には、こうした「国家社会」への視線がからんでいると見てよい。そして右引用では、その「人格」および「個性」「理念」という用語を、「生命」とイコールで結んでいる。「生命」への視線も、「人格」教育と結ばれることによつて、「国家社会」への視線とイコールで結ばれていくための通路が用意されていることになる。

人格教育論の例を示す。女子教育の必要性を説き、みずから日本女子大を創立した成瀬仁藏は著書『新時代の教育』中、「人格的生命の自覚」と題した節で言う。

吾人に此の根本生命あり。故に吾人が生命の要求に向かつて動くに当りては、其の動くに従つて溜るゝことなき慧智となりて現はれ、要求をして満足しむべき、一切の方法を備へ、万般の手段を設け、滾々として尽くるの期なし。²⁶

「根本生命」「生命の要求」といった用語とその文中での語義は、この文章が生命主義芸術教育論思潮の勢力圏内に位置づけられることを証している。生命の要求にしたが

つて行動すればすべてが満たされる、という趣旨は理想主義的に見えるが、成瀬が「生命」の向こうに見ているのは「国家社会」である。決して実利を離れた理想主義の方向を見ているのではない。成瀬は「凡そ人たる者は、悉く、靈妙なる人格生命を有す」としつつ言う。

人は皆其の性格、能力、地位境遇を異にせり。従つて、其の人格的生命の発動を實地に示す所以の道に至つては、必然各人特殊の要求を有せざるを得ず、又其の特殊の要求に基きて特殊の事業を選択せざることを得ず。……此の要求選択は実に其の人格の自然に発し、惹いて、宇宙の靈性に繋る。故に此の最善なる特殊の要求は、即ち其の人の使命にして、其の要求に應じて、選択せらるる最善の事業は即ち其の人の天職なり。²⁷

ここにも先の水鳥川の場合と同様、「人格的生命」という言い方に「人格」と「生命」をリンクさせる観点を見てとれる。「生命」は、ほぼイコール「人格」となる。生命の要求が「宇宙の靈性に繋る」という一節は、生命の「自ら培ひ自ら癒す力」を「一種神秘的のはたらき」とし人間の営みすべての源泉であるとする片上の言葉と、その神秘主義的色合いにおいて響きあっている。こうして、「宇宙

の靈性に繋る」、「靈妙なる」働きの源泉として「人格」と結びつけられた「生命」が「発動」すると、人は「特殊の事業を選択」し「天職」を得る。これは結局、「生命」重視が実業に生かされることを意図したストーリーづくりだと言える。

その証左として、右引用文の直後、成瀬は「人は此の使命天職を自覚するによつて、始めて……貴重なる生涯を作り、貴重なる功業を成し、自己人格の価値を実現し、社会文明に貢献する所あるを得べし」と続けているのであり、直前には「自ら生きんと欲するの意志、之を別言すれば、即ち吾人が斯く生活し国家社会の斯く発達し、文明教化の斯く進歩する所以の根本要求なり、根本本能なり、根本衝動なり」として、「根本要求」すなわち「生命の要求」が「国家社会」の発達、「文明教化」の進歩の方向に向けられるのを想定していることを明らかにしている。

二・三 「人格生命」と「国家社会」への視線

再び片上の論を見る。先に引用した「生命論的、芸術至上主義の時代」の文には次のようにあった。

吾々は自分自らの力によつて、自分自らの力を増大することによつて、更に新しき創造を営まなければなら

ない。⁽²⁹⁾

大正三年、成瀬仁藏は「創造的能力の涵養」と題して言う。

人格生命自具の自発的活動性を、実地具體の功績に於て發揮し、特殊独特の事業を成就する者を創造的能力と爲す。⁽³⁰⁾

片上の、「自分自らの力を増大する」ことによつて「創造を営め、という言い方と、成瀬の、「人格生命自具の自発的活動性を」「發揮」ことによつて「特殊独特の事業を成就」する「創造的能力」、という言い方がよく似ているのに気づかされる。これは偶然の一致ではなく、これまで見てきたように、両者が同じ思潮の勢力圏内にいるためであり、発想の源泉を同じくするからだ。

ただし成瀬の場合は先に見たように、国家寄りの姿勢が比較的濃厚である。ここでは「人格生命」がおのずから備えている「自発的活動性」によつて「特殊独特の事業を成就する」のが「創造的能力」だと定義される。人格教育が生命主義的思想とたくみに結び合わされ、被教育者は「自発的」に「天職」へと駆り立てられる。その過程を称

して「創造的」だとするあたりは老獪な手法と言わざるをえない。ここに見られる「創造」は、「創造」ではあっても、限りなく「生産」にそのイメージは近い。

大正四年、中島半次郎は「教育の目的としての理想的人格」と題して言う。これもジャンルとしては成瀬と同様、人格教育論である。

理想的人格は、……宇宙の生命と人性とを代表し其個性に依り自己独特の創造的生活をなし以て単に自己の人格を実現するのみならず其属する国家社会の進歩達達の為に活動する所の十分の意力ある者で無くてはならぬ^③。

「理想的人格」が「宇宙の生命」と結びつき、十分の「意力」をもって「自己の人格を実現」しつつひいては「国家社会の進歩達達の為」となる、というストーリーは生命主義教育論の特質を典型的に備えている。これを先の成瀬の文章と比較してみれば、両者がいかに同じ発想のしかたを共有しているかわかる。成瀬は「人格生命」が「特殊独特の事業を成就する」のが「創造的能力」だと言い、中島は「理想的人格」は「自己独特の創造的生活」によって「国家社会の進歩達達の為に活動」すると言う。また、

先の引用文で成瀬は「宇宙の霊性」を言っていたのに対し、中島は「宇宙の生命」を言う。両者は、同一主題の変奏ではないかとさえ見える。両者ともその視線の先には「国家社会」がある。

このような用語・論点の共有は、芸術教育論、および生命主義教育論思潮に属する緒論がもつ特徴であった。芸術教育論がもつ共通パターンの源泉は、第一に明治初期の国家主義的教育論であり、それが核となつて、時代の趨勢に応じたさまざまな意匠をまといつたのであった。一群の生命主義教育論もまた、そうして芸術教育論思潮が時代の流行からとりこんだ意匠の側面だと推論できる。

芸術教育論思潮の生命主義とりこみは、国民の「眼」を内面からの自発的な要求として「国家社会」に向かわしめる戦略だった。これもまた、芸術教育論の「進化」の一樣相であった。

三 「眼の陶冶」対「文芸主義」

三・一 片上伸の修身教育論と女子教育論

すでに明治初期より修身教育論と芸術教育論は、優良な生産的国民を養成する目的のもとに強く結びついていた。この組み合わせ自体に目新しさはない。片上の文芸教育論

はこの使い古されたパターンを踏襲しつつ、そこにやや新しい要素を付加している。

次の文は片上が「修身倫理の教課」を批判するくだりである。

複雑な生活の全部を認めて、その全部に互つて、生々伸長しようとする根本の力を強め深めて行かうとはしないで、寧ろ湧きかへり立つ複雑な意欲の部局を修正抑止することに専らであるといふ事実が、修身倫理の教課を空虚な無力な実質なき權威を人に強ひるものと思はしめて居る所以である。

「生々伸長しようとする根本の力」という言い方は生命主義教育論に共通するもので、意味的には「生命」と等置されるものである。ここでは、修身教育にそれを重視する姿勢が必要だと主張しているところに注目したい。修身教育にも生命主義をもちこんでいるわけで、「修身倫理」と生命主義概念の合体が図られている様相が認められるからだ。

片上は続いて「人間の生命の全体的な力、道徳性の根本的な力に対する信念」の必要性を説き、「人間の道徳生活を、有機的な統一ある総合的な力の発現として、多少の傷

害汚損に拘はらず、生々伸長して止まない生命の力の発現として見る」べしとしている。やはり「人間の道徳生活」を「生命の力の発現として見」ており、「道徳性の根本的な力」と「人間の生命の全体的な力」は、ぴったり重なり合う。

ここで生命主義的な人格教育を説いていた成瀬仁藏の、「生命の要求に向かつて動」けば、「根本生命」が「個るゝことなき慧智となりて現はれ」「滾々として尽くる」ことがない、という言い方を思い起こしてみると、片上の「生々伸長して止まない生命の力の発現」という表現のニュアンスは微妙な陰影を帯びてくる。国家主義寄りの気配を漂わせる成瀬も、一見その気配が認められない片上も、両者とも「生命」が人間の生活すべての根源であるからこれを重視せよ、と言う。しかし「生命」の取り扱いかで、両者の行き着く先は大きく異なってくるはずだ。片上の目指すところはどこにあるか、が問題である。これについては次節以降であらためて述べる。

さて芸術教育論を構成するもう一つの主要な要素が、女子教育だった。前々稿で触れたように片上はこの点においても芸術教育論の枠組みを継承しており、「婦人」の教育に多くの紙面を費やしている。とは言え、文芸教育論の範疇で女子教育を語る片上の視点には新味がある。「政治

方面で」の「婦人解放」なら「明治時代でも可なり以前からその端緒が開かれてゐた」のだが、そうではない方面での「婦人解放」は等閑視されている、と、人々の意識の古さに、不満を述べていたのだった。

次の一節は、「婦人の本性の自由」を「文学の題材」とした「イブセンの『人形の家』」を引き合いに出しつつ述べられている。

以上私は、最初に近代文学と婦人解放運動とが密接な関係を有してゐることを説き、次ぎに、婦人解放の意味する最も重大な中心眼目が、女性としての婦人の生活の特色的な方面に就いての、自由、即ち恋愛、結婚、家庭の方面の生活に就いての自由であらねばならぬことを、一と通り説いてきたと思ひます。⁽³⁴⁾

「政治方面」ではない方面とは、「恋愛、結婚、家庭の方面の生活に就いての自由」をさすのであり、また「職業的でない、すなはち即座に目に見えて役に立つやうなものでない方面」⁽³⁵⁾をさす。特に「恋愛」のような内面の精神生活、または私的生活の自由を言つたもので、片上は続けて「最も重大なのは、婦人の心の自由」であり「それが殊に結婚生活の問題に於て必要である」⁽³⁶⁾としてゐる。

明治初期以来、女子にも男子と同等の教養を身につけさせよ、と論じた論客は芸術教育論の分野にも少なくなかつたが、そのほとんどは中村正直の婦人論をはじめとして、優良な国民を育成するための母としての役割をおもんばかつてのものだった。

つまり片上の言う「目に見えて役に立つ」ような目標が定められており、女子教育の実践者である成瀬にしても、「女子は男子同様、智情意に於て永久進歩発展の可能性を潜有し、又其の権利を所有するものであることを信ずるのである」、「真善美とか、生命の無限とか、人格の発展とか、凡て根本的本質は、人類に普遍のものであつて、男女によりて区別のあるべきものではない」⁽³⁷⁾といった主張をするのは、次のような思惑に支えられてのことである。

国民を作る者は到底母にあり、母をして優良ならしめずして、如何にして国民を憂慮うなからしむることを得るか。……文明を進め、社会を富ますが如き青年を生むものは、実に精神と肉体と共に十分の教養を経たる女子其の人ならざるべからず、……⁽³⁸⁾

大正前期の成瀬や明治初期の中村ばかりではなく、大正後期に至る教育論にも同じ傾向は続く。例えば大正期芸術

教育論の典型型を示す島村民蔵の論は、芸術教育論を構成する諸要素を網羅し集約している感があり、「婦人と芸術教育」にも一章を費やしている。次の一節は、ここで「婦人」に対する「芸術的教化」の必然性を説いた部分である。

婦人は子供の眼や心を芸術に對つて開いてやるために、自分自身がすぐれた嚮導者である必要があります。私は美的文化の建設を、芸術教育の普及を熱望します。³⁹

島村もまた、「婦人の天職は母たること」だというステレオタイプの観点に立っていた。もちろん成瀬や島村に、明瞭に功利的意識があつたと断定はできないが、彼らの「国家社会」を意識した立脚点と、個人の「心の自由」を言う片上の立脚点との間には大きな懸隔がある。このあたりに、片上による「文芸教育論」の、芸術教育論思潮の中の位置を探る鍵のひとつがあると考えられる。付言すれば、「婦人解放運動」が「近代文学」との関連のもとに語られている点も注目される。

三・二 文芸主義と「見る」から「読む」への変換
くり返すが、片上伸の文芸教育論は、その用語、論点、および生命主義的な発想において、先行する芸術教育論思

潮、および大正生命主義思潮とその前夜にあたる時期の動きから多くの要素を受容して成立している。一方、片上の論を単独に見れば、そこに国家主義の陰は認められない。ただ、片上がそれに意識的ではなかったにしろ、彼の文芸教育論の外形的枠組みが、国家主義の内面化を暗に指向する芸術教育論思潮の支配的流れを踏襲しているのもまた事実だ。

「文芸教育論」における片上の主張と芸術教育論思潮との大きな相違は、対象となる芸術分野の範囲である。片上は文芸教育の「趣旨」を次のように説明する。

文芸教育といふのは、文芸上の作品を味はしめたり、文芸上の作品（絵画文章等の）を作らしめたりすることの間に、真の文芸が有する人生の包全的総合的な味ひかた観方を、自然に会得習練せしめて、理屈や規則や訓戒などで到底与へられない一種の人間生活信愛感⁴⁰とでもいふべきものに感染せしめようといふ趣旨です。

彼の言う「文芸」が主に「絵画文章」を指すものだとわかる。芸術教育論の対象分野は時代とともに絞り込まれてきたが、大正期の時点でも絵画、工芸、彫刻、小説、戯曲、詩歌、音楽、等々多彩にわたる。その中で中心的位置を占

めたのが多大な経済効果を背景にもつ美術とりわけ絵画だった。

片上は、芸術教育論の中心の対象だった「絵画」を「文芸」にずらし、文芸教育論の中心の対象を「文芸」とした。彼の言う「文芸」は「絵画文章」と表現されており、絵画から文章すなわち「近代文学」への、中心となる対象の移行がたくみに行われている。実際、片上の文芸教育論の題材は、ほぼすべてが「近代文学」作品で占められている。

この、いわば「見る」ことから「読む」ことへの変換を共有し、片上の論と足並みを揃えて教育論を展開した、そしてまた片上と並んで教育プロパーの論者からの批判を受けた文芸教育論者として、西宮藤朝があげられる。

まず片上は「文芸」の価値を次のように説明する。

文芸は、人間生活の一切の意欲を断片的に小刻みにして、或る部分を避けたり抑へたりしながら、こはごは人間生活を生きていかうとするものではないのであるから、即ち一切の人間生活の意欲を抑殺せずして、總てを十分に生かすことによつて根本の生活を強く遅しくして行かうとするのであるから、どんな人間生活の渦巻の中へも、その人間の力を十分に現して行くために喜んで進んで行くのである。

次に「文芸主義」をとなえる西宮藤朝の論を見る。翻訳家であり、詩歌をはじめとする文芸のほか、教育、哲学と広範な分野での評論活動を展開した西宮は、山本鼎、片上伸らの主宰する教育誌『芸術自由教育』にも関与している。西宮は大正十年、「芸術教育」を題目として次のように言う。

吾々の問題は、……その教育によつて人間の中心生命を成長せしめるか、萎縮せしめるか——といふことに、関する問題である。……人間がその生活を深く強く生きる、こと、是れが人間にとつて何を措いても先ず第一に熱望さるゝこととなければならぬ。

先の片上の「一切の人間生活の意欲を抑殺せず」「總てを十分に生かす」「根本の生活」といった表現と、西宮の「人間の中心生命を成長せしめるか、萎縮せしめるか」という表現が、かなり近接した趣旨を表しているのがわかる。西宮は「人間にとつて何を措いても先ず第一に熱望さるゝこと」が「人間がその生活を深く強く生きること」だと言う。これも片上の「根本の生活を強く遅くして行かうとする」という表現に近接している。つまり生命主義教育論

の用語、論点を共有しているのが認められる。

片上には、「修身倫理の教課」を評した、「複雑な生活の全部を認めて、その全部に互つて、生々伸長しようとする根本の力を強め深めて行かう」とするべし、というような表現も見られた。「根本の力」はほぼ「生命」の言い換え表現としてあつたわけで、西宮の言う「人間の中心生命を成長せしめる」ことによつて「人間」の「生活」を「深く強く生きること」をめざすべし、という表現と、用語においても趣旨においても、やはり共通するところが大きい。

片上は文芸教育を次のように位置づける。

人間の道德生活に対して最も微妙な、甚深な、根本的永久的な感化を有するものは文芸であつて、その力に依つて、教育の根本的総合的な事業が成し遂げられなければならぬといふのが、私の提唱する文芸教育の意味である。⁽⁴⁵⁾

片上によれば「道德生活」は「生命の力の発現」だったのであり、だとすれば作家の生命の表現である文芸が道德生活に対して「最も微妙な、甚深な、根本的永久的な感化を有する」のは理の当然だということになる。片上の見るところ、教育の急所かなめは「道德」であり「修身倫理」

である。その道德に対して最も有効な文芸は、「教育の根本的総合的な事業」に不可欠だ、という論法をとっている。一方西宮は、「人間がその生活を深く強く生きることが、第一義的な、尊い生活であるとすれば、教育の目的も亦、それに総攝されなければならぬのは当然ではあるまいか」とした上で、次のように言う。

人間のもろくの精神活動の中で、若し文芸的活動が、最も人間をしてその生活を深く強く生かしめるものであるとしたらどうであるか。教育とても亦、自然文芸活動を無視することが出来なくなるであらう。否、それどころか、その精神を教育の理想や目的の中に採り容れることが、やがて最も賢明な方法であり、且つ然かせざるを得ない必然的な方法であらねばならぬ。⁽⁴⁶⁾

こうして、「文芸的活動」の「精神」が「教育の理想や目的の中に採り容れ」られるべき必然性を語った西宮は、「単なる文芸教育の振興といふことではなくて、文芸主義の教育の提唱」をするのだと宣言する。こうして、文芸こそ教育の中心にすえられるべきものだ、と主張する点でもまた、片上と方向を同じくしているのであつた。

要するに西宮は片上のそれとかなり近接する趣旨で文芸

教育論を展開するに至った。両者が『早稲田文学』という共通の活動の場をもっていたのも要因の一つだっただろうが、それだけではなく、両者とも元来は文芸評論家であるという点も関係しているだろう。西宮は晩年、みずから学校を設立し教育に専念したが、それにしても大正十年前後の時点では、教育界から見れば部外者である。両者とも非教育プロパーのいわば異端者の視点から、しかも絵画に比較すれば低位置にあった「文章」を生業にする者の視点から教育を論じたという立場の共通性により、以上のような接近した位置に立つたと考えられる。

この両者の言う、「近代文学」を主とする「文芸」を教育の中核にすえようという主張は、教育者にとつては急進的に過ぎ、少なくとも全面的には受け入れがたいものだった。次節でそれを示す。

三・三 文芸教育論批判の諸相

片上伸の文芸教育論、西宮藤朝の文芸主義は、芸術教育論思潮の中で、どのような位置を占めていたのだろうか。西宮は従来の教育説を次のように批判する。

我国には一種の国家主義思想がひどく教育目的の建設の上に影響を及ぼしてゐる。教育許りではない、明治

文化の凡ての基調は国家主義が根底となつてゐたのである。而して明治時代の教育目的なるものは、実に此の国家主義と道徳主義とが結合したその基礎の上に樹立されたものである。……其の弊害を救ふものは、実に文芸主義である——と私は考へるのである。⁽⁸⁾

この「明治時代の教育目的なるものは、実に此の国家主義と道徳主義とが結合したその基礎の上に樹立されたもの」だ、という批判は、芸術教育論思潮に関して言うかぎり実に的確である。本稿はその様相を追つてきた。しかし問題は、西宮によるこの批判が、批判たり得ているかという点にある。国家主義批判、という外形だけならば、国家主義寄りの芸術教育論にも珍しくはない。芸術教育ひいては教育一般の政治色、功利的色彩を批判する論は数多くあったが、そのほとんどが、国民を政治的功利的目的に誘導する真意を隠しもつていた。

西宮、および片上伸の、芸術教育論思潮の内における位置をはかる手掛かりとなるのは、両者の従来説への批判ではなく、両者に対する教育プロパーの側からの批判を見ることだろう。片上の『文芸教育論』、西宮の『芸術教育の原理』よりやや遅れて発刊された帝国教育会編『芸術教育の最新研究』に参集した論者たちは、こぞつて片上、西宮

の両者を論難している。ここから、両者への典型的な批判のいくつかを拾ってみる。

吉田熊次は「西宮藤朝氏の文芸教育論中に、吾人の文芸教育の運動は、文芸的教科のみの事にあらずして教育全体の目的に関するものであるといつて居る如き」を「いかに文芸教育論が新しき人生観を主張するかを見るに足りよう」と評価する。また「片上氏の文芸教育論の中にも、教育事業の全体に文芸的精神を浸潤せしめねばならぬといふが如き」に対しても「これ皆その文芸教育論の根底の深くその人生観に出づることを見出すに足るのである」と見る。教育界から見た文芸教育論の特質は、この、「教育事業の全体」の中心に「文芸的精神」をすえるべしとする「新しき人生観を主張する」ところにある。

この、「人間の理想の中に情緒的要素を包含すべしとの主張」する「新しき人生観」に「一面の真理」があることを認めながらも、吉田の最終評価は次のようなものだ。

文芸教育論者の主張する人生観には慥に旧来の教育説が等閑に附したるものを補充するに足る真理が含まれて居ると思ふが、此の正しき人生観を実現せしむる方法手段は、単に幼少なる時期より情緒的生活の享樂を恣にせしむるといふが如き単純なる手段によつて其の

目的を達し得るかどうかは疑はしいのである。⁵¹

つまり片上、西宮の文芸中心主義は目新しい思想だが児童の扱いに関して放縱に過ぎる、という見方をしている。

片上は「心の自由」を言い、西宮には大正十年刊『芸術教育の原理』に先立つて大正八年刊『子供の感情教育』の著書があり、ここで子どもの「同情と愛」の感情をはぐくむ「感情教育」の必要性を説いていた。右はこれらに対する疑義の表明である。吉田は、感情育成のプログラムを「小学生徒若くは中学生徒に適用する」のが良い結果をもたらすか疑わしい、と言うのであり、個人の「心の自由」をこそ教育事業の中心課題としたい片上らとは、教育の目的に関して大きな認識の差がある。

吉田のみではない。稲毛詛風も、「片上氏の見解」は「教育の国民生活改造乃至国民文化創造に於ける地位機能が明白でない」としてしりぞけ、芸術教育のあるべき位置を次のように言う。

芸術と道德と宗教とが渾然として一つになつた情意中心の文化こそ我が国民文化の理想であるが故に、芸術の文化的使命は、其の中心根底であるよりも寧ろ依然として其の一大要素たる点に存するのである。⁵²

まさに、「芸術と道徳と宗教」は明治初期に行われた国家主義的芸術教育論のキーワードであった。ここには言及されていないが、「女子教育」を加えれば完全なセットとなる。芸術教育論および文芸教育論が最盛期を迎えていた大正十三年の時点で、この明治初期以来の「芸術と道徳と宗教」が依然として「理想」の位置を維持していたのうかがえる。

稲毛はこの「理想」を掲げた上で、「芸術の文化的使命は、其の中心根底であるよりも寧ろ依然として其の一大要素たる点に存する」と断ずる。芸術は文化の重要な一要素ではあるが「中心根底」ではない。つまり片上らの言う文芸教育のみならず、芸術教育一般が、教育事業の一要素に過ぎないのであって、いわんや文芸が教育事業の中枢をなすなどあり得ない、という趣旨である。

このような見方は帝国教育会陣営の論者には、おおむね共通認識だったようだ。龍山義亮もまた言う。

今日の教育界に於て芸術教育が高調せらるる結果、あまりに之が価値を絶対視し芸術の教育が教育作用の全体であるかの如く考ふるものが生じたことは大に警むべきである。……道徳が即美であり、活動が即美とな

るといふ風にあらゆるものが人格の下に統合せられて人格美を表現する様に考へられねばならぬ。

芸術の「価値を絶対視し芸術の教育が教育作用の全体であるかの如く考ふるもの」は、教育プロパーの論者にはほぼ見られない。これは主に片上、西宮ら文芸教育論者を言うのである。

片上らの文芸中心主義は、教育界からみれば急進的に過ぎた。教育者にとつてはあくまで、芸術教育は教育事業の一要素なのであって、それは教育全体の目的のために奉仕するべき一分子なのだ。決して教育の中枢に位置させられるべきものではない。龍山の見るところでは、片上らは教育の本分を理解していない。道徳を離れた「美」を唯美主義的に芸術至上主義的に追究するなどは教育の本分にもとるもので、いやしくも教育たるものは、「道徳が即美であり、活動が即美となるといふ風にあらゆるものが人格の下に統合せられて人格美を表現する様に考へられねばならぬ」。龍山のこの考え方にも、芸術教育論のキーワード、「道徳」と「人格」が重要な役割を果たしている。

「人格」陶冶は常に、芸術教育論思潮の一大旗印であった。ここでは、芸術教育において「美」を追究するにもその美は「道徳」と不可分にあるべきであり、「あらゆるも

のが人格の下に統合せられ」るのが理想だという。そのためには「ランゲ」が言うように「純粹なる芸術又は芸術を主とする教科によりて他の価値ある理想を圧迫せんとするはよろしくない」から、「教育を芸術化するに或限度を有し」なければならぬということになり、芸術教科では「唯芸術を見て之を楽しむ能力を得しめることで満足せねばならぬ⁵⁶⁾」、ということになる。

芸術教育論最盛期に多く見られるようになった「眼の陶冶」なる用語は、こうした鑑賞教育重視の方針と、「国家社会」への視線をはらんだ「人格陶冶」の方針が統合されたところに位置を得ている。「眼の陶冶」「眼の教育」といった用語は、前々稿にも見たように、明治大正の芸術教育論思潮に多大な影響を与えたランゲやリヒトワルクの教育論に由来するものであり、もともと産業の振興をにらんでの国民の芸術趣味向上をうながす意味あいをもっていた⁵⁷⁾。

この「眼の陶冶」と「人格陶冶」は、そのリベラルな教養主義的響きと、背後には国家社会への視線をはらんでいる点で、互いになじみやすい用語であった。「眼」を陶冶した国民は、理想的な「人格」を備えた「芸術愛好家⁵⁸⁾」として、「国家社会」の「善良」な構成員となる。

こうしたストーリーをその内実に欠く片上らの文芸主義教育運動は、芸術教育論の重要キーワードたる「眼の陶

冶」に表象されているような、「真の意図」を隠しもった教育に対する、叛乱としての側面をもっていた。

三・四 「真の享楽」への視線

さらに文芸教育論批判を見ていく。龍山の言う、芸術教科が「他の価値ある理想を圧迫」しないようにとの配慮の裏には、芸術教科の、先の稲毛祖風の言葉で言う「国民生活改造乃至国民文化創造に於ける地位職能」への配慮を想定できる。教育者にとつては、あるいは当然のことかもしれないが、芸術教科も「国民生活改造乃至国民文化」をにらんでの一要素としてある。こうした「国家社会」への視線の中で「芸術教科」の存在意義が確認されるのであり、その確認の際に、「人格」がキーワードとなっている。片上、西宮らの文芸主義は、教育プロパグの芸術教育論と用語・論点は共有しながらも（片上、西宮の両者とも「人格」という用語はほとんど用いない）、この手順を共有していないわけだ。

「人格」がキーワードとなる論は枚挙にいとまがない。佐竹富夫も「芸術への教育は芸術品を悟性的見地から取扱ふのではなくて、鑑賞者をしてその全心を傾けて芸術品の精神に立入らしめるものであると主張するのである」として、一見「心情」重視の、そして理想主義的な教育観を提

出する。

芸術の享樂は芸術家の人格に透徹することであり、又芸術品と鑑賞者の間の愉快な対話である。……芸術を享樂する力は吾々の心情の力であつて、之に個人の幸福は依繋してゐるそれ故に、美的享樂といふことは教育の目的として、特別の注意を払はねばならない、といふのである。⁽⁵⁸⁾

「美的享樂」を言い、「芸術家の人格」への「透徹」を言い、「吾々の心情の力」に「個人の幸福は依繋し」てゐることを言う佐竹の論には、リベラルな教養主義の香りがする。「芸術品と鑑賞者の間の愉快な対話」を標榜するあたりには、芸術至上主義的な姿勢さえ感じられる。しかしこうした、「芸術家の人格」を芸術品の背後に見ようとする鑑賞態度には、「個人の幸福」という見かけの目標とは違ふ別のかくれた真の目標へのすり替えがひそんでゐるのを、これまでに多くの実例で見てきた。

佐竹は右のように「心情の力」への理解を見せながら結局、「芸術に於いて官感、感情にのみとらはれ、それに反応した世界をのみ認識し享樂してゐる事は、其は真の享樂でも喜びでもない」という結論に落ち着く。佐竹の説によ

ると、「真の享樂」、「喜び」を得るには「官感、感情」のみにとらわれてはいけない。「生活のアイデアを表現せる芸術」を「鑑賞」するのがよい。アイデアは生活の理想規範である「善美」を具有した、「理性的認識の対象であり」、「真の目的」であり、「そのアイデアのものが」「そのものが」の誤植と思われる」吾人の靈魂のユートピアなのであり、「完全なる樂園」なのである。⁽⁵⁹⁾

こうして「個人の幸福」は、「道徳」の表象としての「生活のアイデアを表現せる芸術」の鑑賞においてのみ、許されることとなる。逆に「生活のアイデアを表現せざる」芸術は「快樂芸術」でありそこには「何等の価値も見出しなければ又道徳要素をも看取し得ないのみならず、却つて害毒を、不道徳をのみ見出すものである」と佐竹は言う。⁽⁶⁰⁾

「快樂芸術」とは、たとえば「創作」である。佐竹は創作を次のように見る。

創作を読むといふ事が、その人の内的生活を豊富にせしめんと言ふ目的のために為されると言ふ事は其その或限定された人のみ用ひられる事であつて、普通人には創作を読む事は享樂であり、娛樂であり、退屈ふさぎの仕術である。創作を読む事を学問すると言へば人皆異口同音に嘲笑し、その誤謬なる事を指摘するで

あらふ。

この「創作」がさすのは「読む」対象としての文学作品である。佐竹の文章も、片上らの「文芸主義」に対する批判としてある。先には「芸術を享樂する力」を擁護していた佐竹が、一転してここでは「享樂であり、娛樂であり、退屈ふさぎの仕術^{しじゆ}」であるような「読むといふ事」への拒否反応を、先鋭に表明している。文芸教育論には、教育者が期待する「真の享樂」への視線が、決定的に欠けていたからだ。文芸中心主義的な「文芸主義」は、このような違和感をもって、教育界で受け止められていた。

結

芸術教育論思潮と片上伸、西宮藤朝らの文芸教育論とは、その外形はきわめて似通つていても、両者の間には教育に対する、そして「芸術」に対する根本的な姿勢の差があった。

文芸教育論がとなえた文芸主義、すなわち教育活動の中心に文芸があるべきだとする主張は教育界に「新しい人生観」として衝撃を与えた。教育プロパーの論者たちにとつて「芸術」はあくまで教育の中の重要な一要素であり、中心ではあり得ない。いわんや、經濟効果を期待できる絵画

ならまだしも、教育者からみればひまつぶしの「娛樂」と見える「近代文学」を「中心」に据えるという発想はなかったのである。

この差は、教育が私的な個人の感情を豊かにするのをめざす文芸主義側の認識と、個人はまず国民としてあり、教育は「国家社会」の中に適切に位置づけられた国民としての「幸福」をもちきたすものだ、という教育プロパー側の認識の差に由来するものだろう。

明治初期より連綿と続く芸術教育論思潮が最盛期に達した大正十年前後、この思潮の標榜するところは、「眼の陶冶」に結晶した。芸術を愛し、その背後に芸術家の人格を見出し、それと対話する幸福を味わうための、「芸術を見る目」を養う。この精神主義的な人格重視の方針が、優良な国民の育成という「真の目的」を達成するために芸術教育論思潮がとりいれてきた巧みな戦略の到達点だった。

この最盛期に便乗するかのように、芸術教育論の論法を身につけ、それと同時期に最盛期を迎えていた大正生命主義の概念をも駆使する、「文芸教育論」が登場する。中心人物たる片上伸ら「文芸主義者」は、人格陶冶、精神陶冶の教材であつた芸術とりわけ絵画の位置役割を「近代文学」に担わせようとした。この「見る」ことの教育に対する「読む」ことの教育の挑戦は、教育界からは抵抗を示さ

れながらも、結果として一定の評価を得るに至った。

昭和三年の片上の急逝とともに文芸教育論はほぼ終焉を迎える。彼の教育論への進出がもたらしたものは、さしずめ精神陶冶の題材としての、文芸の地位向上であろう。つまり「近代文学」に教育効果（精神陶冶）を移入したところに、文芸の社会的位置づけに何がしかの変化をもたらした功績が認められる。ここで因果関係を特定はできないが、円本ブームは文芸教育論隆盛のすぐあとにやってくる。また、生命主義教育論、狭くは生命主義芸術教育論緒論と多くの共通項を見出せる小林秀雄の初期批評も、片上伸、および彼の文芸教育論と芸術教育論との接触なしには成立し得なかったと考えられる。この詳細、および論じ残した何点かの問題については別稿に期したい。

(了)

注

引用文において、固有名詞等、字体に固有の意味がある場合を除き、旧字は新字に改めた。引用文中の「」内は論者による補足である。引用文中の中略・省略は「……」で示した。

(1) 拙稿「「眼の陶冶」と帝国主義(二)」——大正期文芸教育運動の「芸術愛好」——」(『京都語文 第六号』平成十二年十月七日)

年十月七日)

(2) 拙稿「「眼の陶冶」と帝国主義(三)」——大正期芸術教育論に見る国民国家形成の影——」(『文学部論集 第八七号』佛教大学、平成十五年三月)

(3) 拙稿「「眼の陶冶」と帝国主義(二)」——大正期文芸教育論の源流——」(『京都語文 第九号』平成十四年十月五日)ほか、注1・2の拙稿に示した。

(4) 佐々木吉三郎「教育的美学 卷下」敬文館、明治四十五年二月二五日、四四頁

(5) 中島半次郎「人格的教育学と我国の教育」同文館、大正四年五月二八日、二〇九頁

(6) 片上伸「教育力としての文芸」大正十年六月(『文芸教育論』文教書院、大正十一年九月十日、七三頁)

(7) 注8の『芸術教育の研究』(二三一頁)によれば、大正一〇年八月から八日間、尼子止の主宰する雑誌『教育学術界』が主催した「教育学術研究大会」を頂点とする一連の啓蒙運動を指す。尼子止『八大教育批判』(大日本学術協会、大正十二年五月二〇日)によると、具体的には「自学教育論」「自動教育論」「自由教育論」「一切動皆満足論」「創造教育論」「動的教育論」「全人教育論」「文芸教育論」の八つ。

(8) 上野浩道「芸術教育の研究」(風間書房、昭和五十六年二月二八日、二三八頁)に、次のようにある。

彼が詩人北原白秋、画家山本鼎、東洋幼稚園長岸辺福雄らと創刊した雑誌『芸術自由教育』は、『赤い鳥』と並んで大正期芸術教育運動の中心的雑誌で彼の主張と実践を統一する場であった。……そしてこの雑誌を基地に自由

画教育と児童自由詩の運動が全国的に拡がっていった。

- (9) 片上伸「文芸教育の意義」大正九年十月(『文芸教育論』、五八頁)

- (10) 小林左源治「学校生活と芸術」(帝國教育会編『芸術教育の最新研究』文化書房、大正十三年六月二〇日、二七〇頁)

- (11) 「人格的教育学と我国の教育」四四頁

中島半次郎をはじめ、多くの「人格教育」論者による教育論が芸術教育論と相補い合う近い関係にあった。横山栄次は次のように言う。

ヴェーバーの説に従へば教育を為し教授を為す教育者の全活動換言すれば人間陶冶の全活動は芸術的活動でなければならぬ。(『新教育論』目黒書店、大正十四年二月十六日、一四六頁)

- (12) 中島半次郎「人格的教育学の思潮」同文館、大正三年二月二六日、二五二頁

- (13) 同、二五三頁

- (14) 浮田和民「帝国主義の教育」(『帝国主義と教育』明治三四年八月、『明治文学全集』88、筑摩書房、昭和五十年七月三十日、三六四頁)

- (15) 浮田和民「帝国主義の国家観」(『倫理的帝国主義』隆文館、明治四十二年十月一日、二二八頁～二二九頁)

- (16) 「人格的教育学と我国の教育」、八三頁

- (17) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』講談社、昭和五十二年十一月十八日、三八三頁、「片上伸」の項

- (18) 鈴木貞美編『大正生命主義と現代』(河出書房新社、平成

七年三月三〇日)、鈴木貞美『生命』で読む日本近代、大正生命主義の誕生と展開(日本放送出版協会、平成八年二月二五日)を参照されたい。

- (19) 「白耳主義文学」(『帝國文学』明治二八年一月)、『海潮音』序(明治三八年十月)、『マアテルリンク』(『明星』明治三九年十月)など

- (20) 和辻哲郎『ニイチェ研究』東京内田老鶴圃、大正二年十月一日、六二頁

- (21) 拙稿「教育論の中の大正生命主義——小林秀雄と芸術教育論——」(『文学部論』第八五号)佛教大学、平成十三年三月

- (22) 片上伸「生みの力」大正二年一月(『片上伸全集』第一卷)砂子屋書房、昭和十三年十二月三〇日、七頁

- (23) 片上伸「文芸による人間の教育」大正十年三月(『文芸教育論』三四六頁)

- (24) 片上伸「文芸教育の意義」大正九年十月(『文芸教育論』、六五頁)

- (25) 水島川安爾「鑑賞批評の態度」(帝國教育会編『芸術教育の最新研究』文化書房、大正十三年六月二〇日、三六七頁)

- (26) 成瀬仁藏「新時代の教育」博文館、大正三年一月三十一日、二七二頁

- (27) 同、二八二頁

- (28) 同、二七一頁

- (29) 片上伸「生みの力」大正二年一月(『片上伸全集』第一卷)七頁

- (30) 成瀬仁藏「新時代の教育」博文館、大正三年一月三十一日、二八七頁

- (31) 中島半次郎『人格的教育と我國の教育』、大正四年五月二八日、四二頁
- (32) 片上伸『文芸による人間の教育』大正十年三月(『文芸教育論』三三六頁)
- (33) 同、三三七頁
- (34) 片上伸『婦人開放と近代文学』大正九年四・七月(『文芸教育論』二五〇頁)
- (35) 『文芸教育の意義』大正九年十月(『文芸教育論』六〇頁)
- (36) 同、二四九頁
- (37) 成瀬仁蔵『女子教育改善意見』大正七年(三井為友編『日本婦人問題資料集成 第四卷』昭和五年四月一〇日、ドメス出版)
- (38) 『新時代の教育』三六九頁
- (39) 島村民蔵『子供の生活と芸術』高陽社 大正十三年三月十二日、九四頁
- (40) 同、八八頁
- (41) 片上伸『文芸教育の意義』大正九年十月(『文芸教育論』七一頁)
- (42) 視覚芸術の位置づけについて、柄谷行人氏に次のような分析がある。

他の領域では伝統的な学問や宗教が排除され蔑視されたにもかかわらず、視覚芸術のみが近代制度として受け入れられたのはなぜか。それはフェノロサに先立って、日本の絵画・民芸品がヨーロッパにおいて高く評価されていたからである。(三〇三頁)

日本政府は一八七八年のパリ万国博にも、約四万五千点もの作品を送った。即売会でこれらが売り切れた。(三〇四頁)

東京美術学校の創設において伝統派が勝利したのは、それが伝統的だったからではなく、それが西洋側に評価され、且つ産業としても成立していたことによるのである。(三〇五頁)

(柄谷行人『美術館としての歴史——岡倉天心とフェノロサ』、ハルオ・シラネ、鈴木登美編『想像された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、平成十一年四月三〇日)

- (43) 片上伸『文芸による人間の教育』大正十年三月(『文芸教育論』三四六頁)
- (44) 西宮藤朝『芸術教育の原理』天佑社、大正十年六月五日、二五六頁
- (45) 『文芸による人間の教育』三四六頁
- (46) 『芸術教育の原理』二五七頁
- (47) 同、二五八頁
- (48) 同、二八〇頁
- (49) 吉田熊次『芸術教育思潮と其の批判』(『芸術教育の最新研究』二二二頁)
- (50) 同、二二二頁
- (51) 同、二二六頁
- (52) 西宮藤朝『子供の感情教育 小さなたましひに愛と同情とを培ふために』実業之日本社、大正八年三月十日

西宮はこの著書で、「人間の持つべきもろもろの心情の中

で、最も尊い。「同情と愛」の感情を「子供時代からその魂にこれを吹き込むことの如何に必要であるか」を説き、明治以後実利的教育に重きがおかれ、道德教育はあつても感情教育はほとんどなされていない状況を批判する。

(53) 稲毛詛風「教育の芸術化を論じて芸術教育の原理に及ぶ」

『芸術教育の最新研究』一一四頁

(54) 同、一一二頁

(55) 龍山義亮「真の芸術教育」『芸術教育の最新研究』一〇二頁

(56) 同、一〇〇頁〜一〇一頁

(57) 前稿までにあげなかった一例をあげる。次の一節はリヒトワルクによる「好事家主義」奨励を紹介した部分である。

我が工業の将来は、繫つて、次期の国民が目と感動との注意深き教育を受けるか否かにあるのである。今日まで芸術専門家の養成に腐心し来つたのは、寧ろ、方針を誤つたもので、国民經濟の活力は、消費者の教化程度に支配せらるゝものである。見よ、我が獨逸が世界中で、頗る音楽的なる国民であるが、是は決して、二三の卓越したる音楽芸術家がある為ではなくして、全くは、音楽好。事家の多きに依るのである。(佐々木吉三郎『教育的美学 卷上』敬文館、明治四五年七月二五日、四三頁)

(58) 佐竹富夫「芸術の認識論的考察と其の道德性」『芸術教育の最新研究』六〇頁

(59) 同、五二頁〜五三頁

(60) 同、五〇頁